

AGMs amid the coronavirus (#4): 'Efforts to engage in dialogue still a challenge'

(summary translation)

Nikkei, July 2, 2020

"If Oasis continues the dialogue, we will continue the search for suitable individuals, including candidates proposed by shareholders." This was the statement made by Mitsubishi Logistics on June 16, ten days before its AGM. It was an expression of the company's intention to continue engagement with shareholder Oasis Management, and its meaning is not insignificant.

Mitsubishi Logistics, [external] directors of which include those dispatched from within the Mitsubishi Group, received further proposals from Oasis [regarding external director candidates] in late April. The proposals were rejected at the company's AGM, leaving Oasis's requests yet unrealized. Still, Mitsubishi Logistics tried to clarify a forward-looking attitude, explaining, "We didn't have sufficient time to meet with candidates amid the coronavirus. We are heading in the right direction, but efforts to engage in dialogue are still a challenge." Seth Fischer, CIO at Oasis, is calling for changes at Mitsubishi Logistics, and is seeking to resume discussions.

「対話」の努力、なお課題

「今回は配当議案に賛成するが、株主総会後にお金の使い道を説明してほしい」。5月、ニッセイアセットマネジメントで議決権行使を統括する井口謙二は投資先企業に伝えた。ニッセイは配当性向25%未満などで配当議案に反対する基準を持つ。例年、約800社の投資先の2割に反対票を投じる。コロナ下は一律反対ではなく、経営戦略を見極める方針に変えた。

井口らはウェブや電話会議を駆使し数回と面談した。コロナ後を見据えた事業計画を求め、「雇用を切る判断は避けるべきだ」との提言もした。対応を甘くしたわけではない。井口は「納得できる回答が得られない場合、1年後の総会には反対にまわるので」と迫る。

投資家と企業の「対話」の重みが増している。コロナ下の総会で経営や統治改善が十分に進まなかった分、投資家が来年を見据え改革を促しているからだ。3月の機関投資家の行動指針改定で対話の成果や議案の賛否が問われる。

否理由の公表が義務づけられ、こうした流れは加速している。「オアシスが対話を継続するなら、今後、株主提案された候補者も含めて適切な人物を探す」。株主総会を10日後に控えた6月16日、三菱倉庫の公表資料にはこんな文言があった。物言つ株主のオアシス・マネジメントと対話を続ける意思表明であり、持つ意味は小さくない。

三菱グループ出身の社外取締役が、オアシスから別の候補の提案を受けた。提案は総会で否決され、主張は今もかみ合っていない。それでも三菱倉庫は「コロナで候補者と会えず時間が無かった」と説明、前向きな意思を示した。「正しい方向に向かっていくが対話への努力はなお課題だ」。オアシスの最高投資責任者セス・フィッシャーは変化を求め、議論を再開する。

対話は海外で常識だ。物言つ株主、ニューヨーク州職員退職年金基金は3月、米コカ・コーラへの株主提案を取り下げた。トップの報酬決定に従業員の給与水準を考慮するよう求め、会社が沿う方針を示したからだ。

企業と投資家が真剣に議論しあう土壌は経営の最適解を生む。経営環境の改善が見込める来年はもう言い訳はできない。コロナ下で芽生えた対話を続けられない企業は、世界の投資家からそっぽを向かれることになる。(敬称略)

オアシスのフィッシャー氏は総会後も対話の拡充を求める

江口良輔、山田航平、増田咲紀、桑野貴、宮本祐則、藤崎健太、坂辺淳、荒木望が担当しました。

コロナ下の株主総会（４）「対話の努力、なお課題」（迫真）終

2020/07/02 日本経済新聞 朝刊 2 ページ 998 文字

「今回は配当議案に賛成するが、株主総会後にお金の使い道を説明してほしい」。5月、ニッセイアセットマネジメントで議決権行使を統括する井口譲二は投資先企業に伝えた。ニッセイは配当性向25%未満などで配当議案に反対する基準を持つ。例年、約800社の投資先の2割に反対票を投じる。コロナ下は一律反対ではなく、経営戦略を見極める方針に変えた。

井口らはウェブや電話会議を駆使し数百社と面談した。コロナ後を見据えた事業計画を求め、「雇用を切る判断は避けるべきだ」との提言もした。対応を甘くしたわけではない。井口は「納得できる回答が得られない場合、1年後の総会は反対にまわるので」と迫る。

投資家と企業の「対話」の重みが増している。コロナ下の総会で経営や統治改善が十分に進まなかった分、投資家が来年を見据え改革を促しているからだ。3月の機関投資家の行動指針改定で対話の成果や議案の賛否理由の公表が義務づけられ、こうした流れは加速している。

「オアシスが対話を継続するなら、今後、株主提案された候補者も含めて適切な人物を探す」。株主総会を10日後に控えた6月16日、三菱倉庫の公表資料にはこんな文言があった。物言う株主のオアシス・マネジメントと対話を続ける意思表示であり、持つ意味は小さくない。

三菱グループ出身の社外取締役がいる三菱倉庫は4月下旬、オアシスから別の候補の提案を受けた。提案は総会で否決され、主張は今もかみ合っていない。それでも三菱倉庫は「コロナで候補者と会えず時間が無かった」と説明、前向きな意思を示した。「正しい方向に向かっているが対話への努力はなお課題だ」。オアシスの最高投資責任者セス・フィッシャーは変化を求め、議論を再開する。

対話は海外で常識だ。物言う株主、ニューヨーク州職員退職年金基金は3月、米コカ・コーラへの株主提案を取り下げた。トップの報酬決定に従業員の給与水準を考慮するよう求め、会社が沿う方針を示したからだ。

企業と投資家が真剣に議論しあう土壌は経営の最適解を生む。経営環境の改善が見込める来年はもう言い訳はできない。コロナ下で芽生えた対話を続けられない企業は、世界の投資家からそっぽを向かれることになる。(敬称略)